

中国60年代と世界

第2期第12号(通巻第19号)2018.12.27

発行人 〈中国60年代と世界〉研究会(幹事・土屋昌明)

編集人 文革50周年再検討会編集グループ

〒214-8580川崎市多摩区東三田2-1-1-9603 tuwuchangming@yahoo.co.jp

例会報告…(1)／コメント…矢吹晋・福岡愛子(3)／蔵出し批評：武田泰淳「中国文化大革命を語る」抄…解題・前田年昭(4)／例会予稿：中国亡命文化論の提唱…土屋昌明(6)／文革のもう一つの真実に迫る 書評：『世界史の中の文化大革命』…朝浩之(9)／^{研究}思想史研究の前提、立場を明らかにすること…前田年昭(10)／^{研究}胡傑『私が死んでも』と文革の謝罪の問題…土屋昌明(12)／胡傑『私が死んでも』字幕(その4)…土屋昌明編訳(17)

例会報告(10月25日)

インドネシア9・30から世界史と文革の関係を考えられるか

10月25日(木)19時から専修大学で10月例会がおこなわれ、森瑞枝が「馬場公彦氏の新著『世界史の中の文化大革命』(平凡社新書)をめぐって」という題目で発表した。

まず文革について関心を持っている契機について述べられた。発表者の世代は、幼少期に文革の映像をテレビで見て、別世界だと感じた。成人してから、映画『ラストエンペラー』や、たまたま見た文革中の模範劇の映像などから、奇妙な世界だと感じていた。その後、中国に暮らすことがあり、自分の中で視野や価値観が広がり、中国に対して自分の問題として興味がわいた。とくに、自分が日本思想史を専攻するようになり、中国の思想史と比較して狭いことに気がついた。3・11以降、自分たちが世界の潮流にさらされていることに気づかされた。そうしてみると、現代中国史は人類史のフロントであり、それに関心を持つのは当然のことと考えるようになった。文革は、中国一国内の権力闘争としてのみ考えるのではなく、人類史の上で考えるべきであり、現在、これからを考える上での参照系として文革を考えられるのではないか。だから、本書のように、世界史の震源として文革をとらえようとする、中国研究者の占有物としてではなくとらえようとする態度は共感できる、とのことである。

つぎに本書を読んだ率直な感想が述べられた。まず、文章・用語に違和感が強い。例えば、文革の影響を考えるのに「幽霊」という語を使っているが、歴史を考察しようとする立場としては、情緒的でありジャーナリスティックだと感じる。つぎに、著者の基本的なスタンスに疑問を感じる。とくに文革を

どのようなものとしてとらえるかについて、序章での提示をみると、かなり旧態依然としているように感じた。中国共産党の見方を基本的に踏襲しているし、日本の一般的な解釈、文革は毛沢東の妄想でできあがった集団ヒステリーであるという認識に立脚している。

また、いわゆる文革と世界史の関わりへの解釈について不満が述べられた。インドネシアとの関連性をとりあげることで「世界史」と銘打っているのは、大風呂敷のひろげすぎではないか。さらに本書では、まずインドネシア9・30におけるインドネシア共産党のクーデター未遂の背後に、毛沢東による「革命の輸出」があり、その失敗に毛沢東が落胆した結果、国内で文革を発動した、という筋道になっているが、これを論証するためには、歴史学的に史料が欠如していて断定したい事案をクリアしなければならない。一部使われている史料も史料批判が不徹底で、どれほど信憑性が担保されているか不安である。

発表者によれば、本書は総じて、毛沢東の文革に対する日本人の受け取り方を拡大鏡的に示していると言える。また、学術権威や大学(業界)と適正な距離をもって独立して研究することが、現今の日本でいかに困難であるかも体現している。そして、私たちが考えておかなければならないのは、「革命」とは何かという問題ではないか。本書では、インドネシア9・30を「革命」として、革命の失敗と言っているが、はたしてそう言ってよいのか。そのように言うと、「文化大革命」という革命とつながってくる感じがしてくる。文化大革命との関連を「革命」という言葉で説明しようとするなら、なにをもって

「革命」というのか、政権交代や権力闘争を「革命」とは言えない。この点をしっかり考えておかないと、話がずれていくことになる。本書のように、文革を権力闘争、毛沢東による権力奪取ととるなら、それは「革命」ではなく、毛沢東は「革命」と言いつつ、「革命」をするつもりではなかったことになるが、インドネシアでは「革命」をするつもりだった、ということになってしまう。

最後に、現在の問題との関連が述べられた。現在の世界においては、グローバル資本主義を転覆できてはじめて「革命」と言えるのであり、世界史と革命の問題をそこまでつなげて論じることはできないだろうか。だとすると、毛沢東はなぜ人々を革命にまでもっていったのか、それは彼の権力闘争の力ではなく、文化大革命の内部にあった人々の力が想定されるべきで、それが世界史とつながる契機を示してほしい。本書で、資本主義や社会主義ではない、脱植民地闘争に着目しているのは評価できる。当時、反帝国主義・脱植民地闘争が頓挫して、経済支配による新しい帝国主義が興りつつあり、それへの抵抗が文革へと接続されるという本書の見取り図は、現在の有効性も持っており、より掘り下げられるべきであろう。

フロアからは、次のような発言があった。発表者は史料批判や出典について厳しい指摘をしたが、新書というレベルでは仕方ないのではないか。本書が世界史においてインドネシアに注目したのは、文革

の前にあった、社会主義陣営内の中ソ論争と民族解放としてのバンドン会議の流れの上でインドネシアの9・30が位置づけられたからで、当時の文脈では理解できる。当時、アジアにおける社会主義革命としてインドネシアが目されたものの、史料としては東方書店から出た人民双書の1冊『インドネシア 血の教訓』という本しかなく、自分たちで勉強しようとしたものだが、本書はそこにつながる。本書は、2016年に静岡大学の楊海英氏らがおこなった「文化大革命と国際社会」というシンポから続く成果である。9・30の虐殺と文革をだぶらせることで、文革に対するマイナスイメージを再生産させることになってしまう。毛沢東に乗っているとインドネシアの二の舞だという日本共産党の言い方があり、その説にひっぱられている感じがする。沈志華の見解があまり参照されていない印象を持つ。いろいろな材料を盛り込みすぎて、発表者も言ったように、ジャーナリストに流れる部分がある。インドネシアの当時の政治問題は非常に微妙で、インドネシア農業経済の専門家である加納啓良氏ですら、政治問題については一切書かないのは、この問題の難しさを表している。

以上、発表内容の概略とフロアからの発言の概要を記した。発表もフロアからの発言も非常に盛り上がり、参考になるものがほかにも多くあった。

(文責 編集部MT)

〔(20) ページからのつづき〕

いにくくて、スラスラと自己批判がなかなか言えない人いるんです。スラスラ言えないのがあたりまえなんです。

実際、若い人にまかせて生産が増加していけるかどうかは、やってみなきゃわからないわけです。指導者としては非常にむずかしいところだと思うんです。しかし、解放後の十七年間にカスがたまって、たとえば職場なんかも見廻れないで、いつのまにか自分がこぼれてしまう。

これはわれわれ自身のことを考えても確かです。小説を書き始めた頃は、真剣にやるけれども、文学全

集に入るようになればそれほどやらないでも大丈夫だから、文学全集が多く出るような現状をこわされたくない。だから、文壇でももし若い人が、造反団のようなものをつくって、徹底的に第一次戦後派を否定するというになると、ぼくらだって最初は少くとも抵抗すると思う。お前達はそういうが、ロクな作品を書いていないじゃないかと。そう反発すると思う。それが人間の本性でしょう。〔後略〕

『『黄河海に入りて流る 中国・中国人・中国文学』勁草書房、1971、初出：『中国』45、1967.8〕

例会コメント

9・30と文革の流血を結ぶだけでは世界史の中の文革を論じたことにはならない

森瑞枝の酷評を聞いて共感するところが多かった。森と私の年齢差は、ちょうど一世代、親子ほどの年齢差である。世代間の断絶は中国でも日本でも甚だしく大きい。その断絶する世代間で共通する問題意識を感じることができたのは、老人にはまことに嬉しいことで、冥土への土産になる。この心地よい感覚を裏返すと馬場著への不満になる。「世界史の中の文化大革命」というテーマは、研究に値する重要テーマである。だが本書は羊頭狗肉の印象を否めないのが惜しい。インドネシア9・30事件とその後の虐殺は、毛沢東の文革発動の動機あるいは契機の一つとして、重要な事件であることは明らかだが、この悲劇と、文革の流血を結びつけるだけでは、「世界史の中の文化大革命」を論じたことにはなるまい。

私自身は1969年秋に一カ月、東南アジア諸国を放浪し、次いで71年春から73年春までシンガポール南洋大学と香港大学に遊学し、放浪を重ねた。ベトナム戦争は（結果的には第三次世界大戦には至らず）最終段階を迎え、佐藤栄作は沖縄返還密約に熱中し、キッシンジャーは毛沢東・周恩来との会談を画策していた。第二次大戦が残した三つの分断国家のうち、最も早く統一をなし遂げたベトナムに続いて、その20年後にドイツ統一が行われ、南北朝鮮の統一に向けた動きは、いまようやく始まった——これが20世紀後半から21世紀10年代の潮流である。「世界史の中の文化大革命」という課題は、この長期的うねりの渦中で、毛沢東や紅衛兵たちが何を考えて行動したのか、その動きに刺激を受けて、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの知識人や労働者たちがどのように

行動したのか、そこに視点を定めて考察する必要がある。この問題意識を欠いたまま、検屍作業に熱中するのは、何を意味するかを

反省すべきだ。私は当時、アジア経済研究所に勤めていたので、マレーシア、インドネシア、フィリピンの農村に深く入ろうとしていた同僚達から、いわゆるコーネル・マフィアやパークレイ・マフィアとCIAのつながりをいやというほど聞かされていた。フィリピンでもマレーシアでも、貧しい農村では、ゲリラたちが実際に活動していた（私自身もマレーシアの某ジャングル近くでゲリラ放送を聞いたし、タイの国境近くの町で休暇中の米軍黒人兵士やそのタイの恋人たちと酒を飲んだ経験がある）。そうしたアジアにおける革命と反革命の動きは、ラテンアメリカにおけるゲバラのゲリラ活動を刺激し、アフリカの独立と独立以後の経済開発に小さからぬ衝撃を与えていた。日本における全共闘の闘争やフランスにおけるカルチュラタンは、これとの連帯を意識していたはずだ。これらの闘争がほとんどすべて失敗した最後の段階でソ連が解体し、東欧や北欧が独立し、グローバル資本主義の天下となった。しかしながら、グローバル資本主義の暴走は三日天下に終わろうとしている。階級格差が極度に拡大し、資本主義への幻滅は世界中に広がっている。にもかかわらず、これが社会主義への期待には直結しない。旧社会主義の負の教訓があまりにも大きいからだ。いま着目すべきは、デジタル中国経済を基軸としたアジア経済の猛烈な発展だ。その勢いは誰にも止められない。文化大革命が失敗した後の中国の変貌とこれに牽引されるアジアの姿を直視し、彼らが何を求めているのかを再考することによってのみ、「世界史の中の文化大革命」を評価する視座を獲得できるのではないか。(2018.12.17)

かつて共有されていた「革命」はなかったことにはできない

大変刺激的な議論を喚起したこと自体が、本書出版の意義といえるだろう。

著者の意図は、通常の「十年の災厄」史観を脱し

て「国際的要因と越境性を重視したもう一つの見方を提示」(p16)

福岡愛子

することだという。彼は、中国で紅衛兵が退場して以降、日本の論壇における対中観が、チャイナウォッチャー的な「客

体観察型認識」に一本化されていく傾向に疑問を抱いてきた。本書では、毛沢東の「能動的革命実践」

という側面だけでなく「革命を願望する客体としての人民の側のリアリティに肉迫していかなければならない」という。そして今こそ「資本主義の暴走を防ぐための構想」を求め、破壊願望を蔓延させないためにも「虐げられ、差別され、社会の周辺に追いやられた人びと」を切り捨てない道を探ることを、立ち向かうべき課題とする (p317)。

しかし本書には、具体的な説得力に欠ける論述や表現が多々あり、例会でも不満が噴出した。私自身も、たとえば「革命」という語が多用されながら、著者の革命に対する夢と挫折と恐れとがないまぜになったまま、対象化しきれていないことに違和感を覚えた。そしてあらためて、地方大学で欧米一辺倒の趣味と思考に明け暮れていた私でさえ、「革命」というものに確かなリアリティを感じていたことを、思い出した。1968年からの4年間、ベトナム反戦を通じて反米意識が高まるなかで、「革命」は希望にも必然にも思えたのだ。

「革命」を目指した人々の行動が、惨憺たる結果に終わった多様な現実については、まだまだ知られ

ていないこと、語りつくされていないことが多いはずだ。それを知る努力を怠ってはならないが、しかしどんなに否定的な現実が暴かれたとしても、現状に対する鋭い問題意識と、それを構造的に変革すると信じるに足る理想とがあったことは、同時代の経験的事実として忘れたくない。今となっては、「革命」という語そのものが「テロ」や「暴力」と同義となったり色あせたりしているが、かつて少なからぬ人々に共有されていた象徴的現実、なかったことにはできないのだ。

客観的な国際情勢の変化に応じて人々を主体的に駆り立てたものは何だったのか、それはいかにして失敗したのか、という問いを探索し続けることは、新たな構想を模索することにつながるだろう。かつて、革命を願望するだけの客体であり文字通り周縁化されていたがゆえに、「革命の夢」に参加することも無残に傷つくこともなかった身としては、なおのこと自ら引き受けるべき課題として立ち向かわなければならない。 ☆

歳出し批評

武田泰淳「文化大革命を語る」(抄)

解題・前田年昭

〔解題〕武田泰淳は、蔑視でも迎合でもなく、中国を見つめ、自らと日本を考え続けた稀有な知識人だった。「天皇の軍隊」の一兵士として中国侵略に加わり、短編「非革命者」や「わが子キリスト」といった作品を書いているが、革命者になりきれぬ自分自身を見つめ続けることで、その根元からの(ラジカルな)批判精神を獲得したのではなかったか。

奴隷は労働し、主人は富を得る。だが奴隷は労働を通して自然と社会を知り、自己を形成することができるが、主人は消費するのみで、労働による自己形成ができない。奴隷が自由と自立を獲得していくのに対して、主人の生活は自由と自立を喪失していくのみである。どちらが真に自由であるか。

武満徹は、文革を中国人民が「時の^{あるじ}主」たろうとする試みとみた(「中国の時」、本誌第2期第2号掲載)。武田泰淳は、生産闘争こそが革命の基底的な

闘いであることをしっかりとここで指摘している。働いて生きることが、人間の基本なのである。昨今の北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)に対する視線と同様に、大躍進や文化大革命に対して、“異常”な人々の営為だと決めつけ、後知恵的な講釈を疑おうともしない似非「親中国」派の歴史観の根底には、この人間の基本に対する無理解があるのである。

普通の生活が続いている

わたしたちは、四月十三日から五月七日まで^{★1}、二十四日間、中国各地を見て廻りましたが、その間わたしたちを案内してくれた人は、中国作家協会の人々の手から手へ渡されて中国各地を廻って歩きました。いわゆる実権派と呼ばれる人達に、どうい

人が実権派なのかわかりませんが、それらの人々にはお目にかかれなかったのです。ですから、この報告は、造反派の人々を通して見た中国文化大革命ということになるわけです。

わたしたちが広州に着いた時、ちょうど交易会★2が開かれており、日本から八〇〇人も行っておりますから、日本人が非常に多くて、文化大革命を十分に味わって帰ってもらおうというサービスの心があるか、われわれの見ているところでは、なるべく文化大革命らしくやってくれるわけです。広州には当時三千名ぐらいの貿易関係者が、各国から集まっていたから、文化大革命をここでやっているんだということでしょうか、壁新聞も多いし、楽隊とか踊りとか行進が非常に盛んでした。

それで、日本の新聞がさかんに読者の興味をそそるような記事を報道して、それは決してウソを報道しているとはぼくは思いませんが、しかし、ぼくが一番に感じたのは、文化大革命を確かにやっている、やっているが同時に、中国人の普通の生活が続いているということです。これは当り前のことですが、新聞では結局中国人が今日も暮らしている、明日も暮らしているだろうという、ただの暮らしということでは、ニュースになりませんから、暮らしているんだが、非常に切迫した事態に直面したというニュースをどうしても書きたい、それは当然だと思えます。日本の記者が決して事実を歪曲したり、悪意があってやっているとは思いません。

しかし、わたしはどうしても、中国の文化大革命を考える場合に、文化大革命はもちろんやっているんだが、中国人が毎日暮らして、ものを食べたり、子供を生んだり、結婚したり、ものを考えたり、われわれと同じような生活をやっているということをやまず最初に考えないと、新聞にでるニュースが特別の色彩を帯びてくる、そういうふうに感じました。というのは、大字報がさかんに貼られている、これは事実です。新聞の報道している通りです。糊のにおいがプンプンするぐらい、街中に貼られています、広い土地を歩いてみますと、それが中心事では

あるが、それは街のほんの一部にすぎないのです。

これはたとえば、日本で交通事故が発生しているその状態だけとりあげて外国の新聞記者が報道するならば、日本では車の危険を感じないでは暮らせないというふうな感じを受けるかも知れない。確かに多くの人が交通事故で死んでいるが、それによって日本の生活が崩壊するふうにはわれわれは感じません。それと同じように、新聞のニュースだけを見ていて、ありのままの中国を見ないと、どうしてもわれわれに、中国人が生きている普通の人間であるということをおぼえてしまうのではないか、と思うのです。

それでないと、中国文化大革命があったために、日本人の中国に対する関心が上がったということは大変結構なことで、批判する方も是認する方も大いに議論したらいいと思うんですが、その根本に、かれらは生きているんだ。かれらはわれわれと同じように、三度々々食事をとり、教育もしなければならぬ、ものを作り出さなきゃならない、国家もつくっていかねばならない、法律も行っていかなければならない、外交もやらなければいけない、そうした普通の国民にすぎない。それをまちがって中国だけが特別なんだと考えるのは、大変困ると思うんです。

実権派の心情

会社、中国では会社といっても人民公社のようなものですが、または工場へ行くと、必ず造反派の人が出てくる。それと一緒に社長あるいは工場長という人がでてきます。われわれの連れて行かれる会社や工場は、もちろん造反運動が終って安定した、つまりその指導者の割り振りがもう決まったところですが、そこでは両方でできます。造反派は人材を決して抹殺しているのではないことを示すために、社長あるいは工場長の自己批判した人が出てくるのでしよう。

その社長なり工場長は、もちろん年をとっているわけです。少くとも毛沢東と同時、あるいは少し遅

〔(20) ページにつづく〕

★1 1967年のこの期間、日本作家代表団の団長として訪中。当時、「秋風秋雨人を愁殺す 秋瑾女士伝」を『展望』に連載中(翌年単行本にまとめられた)。

★2 中国輸出入商品交易会の略称、1957年春から毎年、春秋2回、広州で開催された。文革期にも外国人が参加できて商談も進んだ。武田は、この交易会の、対外的な文革プロパガンダという目的を指摘している。同様のことを、広州の宣伝画制作で当時活躍した李醒韜が胡傑監督『文革宣伝画』で述べている(土屋ほか編『文化大革命を問直す』勉誠出版、2016、所収「文革プロパガンダとは何か」参照)。

12月例会（2018年12月27日）報告予稿

中国亡命文化論の提唱

土屋昌明

現在の日本の中国研究が視野から失いかけている問題に、中国人亡命者による創作・批評の問題があり、この問題には、従来の中国研究を乗り越える一つの可能性があることを今回の発表で示したい。

文学の分野が代表的であろう。中国文学における「亡命文学」の研究は、ほとんど看過されてきた。社会主義国の作家が亡命して執筆活動をする例は、旧ソ連などをみるまでもなく、非常に多くの事例がある。研究が少ないと目されるチェコの作家ですら、アメリカに亡命したエゴン・ホストフスキー（1908-1973）や、フランスに行ったミラン・クン德拉（1929-）など有名作家がいる。しかし、文学研究ないし文化研究で「亡命文学」の全体像を把握しようとする試みは十分とはいえ、とりわけ文学大国である中国の亡命者の著述活動に対して、日本の読者・研究者は冷淡な態度を持しているといわざるをえない。

現在の中国研究で中国人亡命者の創作・批評があまりとりあげられないのには、三つの理由があるように思われる。

第一に、中国研究が中国（＝中華人民共和国）というネーションにとらわれる傾向を伝統的に持っていて、そこからぬけられないばかりか、現在の中国の大国化によって、さらにその傾向を強めている点。かつて杜維明が、世界で共有されている中国文化の共同幻想を、中国のネーションから解放するの確な用語として「文化中国」を提唱したが、今やその杜維明がハーバードから北京に移り、官製の学術賞のトップに名をつらねているのは象徴的である。さらに中国というネーションにとらわれる伝統は、亡命先の外国語で活動する者を完全に視野からはずさせてしまう。例えば、フランスに亡命したフランソワ・チェンの作品が辻由美によって紹介されているが、読者・研究者からすれば、これはフランス文学の問題にみえる。しかし、複数言語を用いて執筆

活動をおこなうことがあるのは亡命作家の特徴でもある。チェコ出身では、作家リブシェ・モニーコヴァー（1945-1998）はドイツ語で執筆するし、詩人ペトル・クラール（1941-）はフランス語とチェコ語で執筆する、など枚挙に暇ない。私がベルリンにいる廖亦武にインタビューした際、彼はドイツ語をゼロから学び、将来的にはドイツ語で執筆したいと語っていた。バイリンガリズムは「認識論的な冒険」（今福龍太「バイリンガリズムの政治学」『クレオール主義』ちくま学芸文庫、2003年、357頁）となりうるものであり、新たな文学の地平を切り開く可能性がある。中国文化研究には、この視点が欠如しているようだ。

第二に、過去の中国人亡命者に対する研究が、孫文や章太炎など、亡命したときに自分の体勢をたてなおし、帰国して大成した人物を中心に考察されてきた点。この場合、亡命時の創作・批評は、帰国するまでのモラトリアムのようにみなされ、亡命先でおこなわれた作品の創作性や批評性は問題にされなくなる。たとえば郭沫若（1892-1978）は、日本での亡命期間に甲骨文字の研究をしたが、その成果が参照されることは多くても、その研究そのものが持っている、中国文化の根源を探索することの同時代的な批評性が検討されることはあまりない。ましてや、帰国できなかつた（＝大成しなかつた）人物、たとえば汪兆銘や胡蘭成などは問題外となる。

第三に、亡命することで中国国内にいたときのテンションが失われたとみなされる点。フランスに亡命した高行健が、もし2000年にノーベル文学賞をとらなかつたら、彼の作品が日本で注目されたか疑わしいように思われるのは、その例にできるかもしれない（1989年にパリで執筆した代表作『靈山』が、飯塚容によって翻訳出版されたのは14年後の2003年）。

以上の問題点は、亡命者を本体から離れたもの、周辺者とのみ考えているからであり、本体から離れ

た周辺者が持つ特性を見落とししている。中国人亡命者の特性を考えるにあたり、翰光監督が天安門事件前後の亡命者取材した『亡命』は啓発的である。ここには、何らかの文化によって全面的に自己を変える（張伯笠）、その反対に空間的な移動だけを受け入れて自己は維持する（鄭義）、複数の文化を融合して新しい文化を創造しようとする（高行健）、という亡命の三つの方法あるいは立場が紹介されている。張伯笠はアメリカでの亡命生活の苦悩を経てキリスト教を見だし牧師となった。鄭義はアメリカでも中国語による執筆を堅持し、執筆に関しては場所が変わっただけという。高行健は、中国文化の神髄を禅や老荘思想に見だし、それを小説や演劇で文学化している。

中国人亡命者には、どことなく屈原をしのばせる風格がある。屈原は、楚の懷王が秦の張儀の謀略にだまされるのを諫めて受け入れられず、入水自殺した。『楚辞』「漁父辞」には、失意に放浪する屈原が漁師と出会って話し合うという戯曲が伝えられている。もと大臣だった屈原に出会って驚く漁父に屈原はこう語る、「世を挙げて皆濁れるに、我独り清めり。衆人皆醉へるに、我独り醒めたり。是を以て放たれたり」と。漁父は反論する、「聖人は物に凝滞せず、能く世と推移す。世人皆濁らば、何ぞその泥を濁して、その波を揚げざる？ 衆人皆酔はば、何ぞそのかすをくらって、そのしるをすすらざる？ 何の故に深く思ひ高く挙がりて、自ら放たしむるを為すや」と。屈原は答える、「むしろ湘流に赴きて江魚の腹中に葬らるとも、安くんぞ能く皓皓の白きを以て、世俗の塵埃を蒙らんや」と。漁父は莞爾として笑いながらも、「物に凝滞せず、能く世と推移す」の道理を歌いながら去る。現代の中国知識人にとって「湘流に赴きて江魚の腹中に葬らる」には、三つの選択肢がある。第一は文字通り自殺して果てる。第二は牢獄に坐す（牢獄にいらなくても、暮らしが牢獄となる。タルコフスキー監督『ストーカー』「どこにいても牢獄にいるような気がする」）。第三が亡命である。鄭義はこう述べている。「作家やインテリが生活に逼迫し、亡命生活に耐えきれなくなって転向し、統治者に頭を下げたら、存在価値すら失ってしまう。中共に妥協して反省文を書き、罪を認め

れば帰国を許されるとか、ビジネスや永住権の便宜を受けるとか、帰国して作品を発表できるなどの見返りと取引したら、何よりも89年に虐殺された大勢の若者や市民に申し訳ない」（『亡命』パンフレットより）。

かの劉曉波は、第二の選択をした点で、亡命者と異なるにしても、同じ問題に立っていた。この原稿を書いているときに、08憲章から10年を迎えた。本人は、瀋陽の病院で亡くなったあと、あつという間に火葬に付されて、遺骨は船から海に流された。もし彼が亡命して海外のしかるべき病院に収容されていたら、このような埋葬方法をしただろうか。またもし彼の遺骨が中国国内に埋葬されていたら、どうだろう。そこは自由と民主の聖地となり、彼の遺志はかたちをもって伝えられた。劉曉波は、国土（故郷）でもなく海外（亡命）でもない場所に遺棄された。これこそ、彼の遺志を亡きものにする最良のやり方である。

劉曉波は、亡命を拒んだが否定したわけではない。海外からの声やまなざしが、実際に中国人に大きく影響する。劉氏の死亡報告の記者会見で、報告者が記者に質問させないと断ったとき、会場にいた女性記者が大声で、記者に質問させない記者会見なんておかしいだろう、世界中が見ているんだ、みっともないぞ！と声をあげた（最近の日本の政治家の記者会見を想起）。その世界中の「目」をリードするのが亡命者である。また、海外からの「目」は、権力に虐げられた人々の力にもなる。翰光監督『亡命』に登場する陳破空は、獄中の不当な労働状態を手紙に書いて海外に告発したが、短波放送で自分の手紙のことが海外で話題になっているのを聞いて「国際社会が関心を寄せてくれているのだから耐えなければ、と非常に勇気づけられた」と述べている。

さて、もう一つの立場が亡命文化を考えるのに重要である。亡命者は、故郷から離れた流れ者、旅を人生とする者である。この点で、エドワード・サイードが『オリエンタリズム』で言及したアウエルバッハがとりあげた、サン＝ヴィクトルのフーゴの『ディダスカリコン』の言葉は味わい深い。いわく「徳の大いなる原理は、修練を受けた精神が、まずは目に見える移ろいやすいものが姿を変えていくありさまを少しずつ学びとり、ついでそれらを放棄するこ

とができるようになるということである。生まれた土地が快いという者は未熟な初心者である。どの土地も自分の故郷であるという者はすでに強い。しかし、世界全体が異郷であるという者こそは熟達者である」(高木昌史ほか訳『世界文学の文献学』みすず書房、1998年、417頁)。この文は、旅ないし流離の人生を自己修練の場ととらえており、後半の文言は修練の深まりを言い当てている。「生まれた土地が快い」という者は、いまだ存在の無常を学んでいない。「どの土地も自分の故郷である」という者は、すでにそれを知っている。「世界全体が異郷である」という者は、無常を知った自己すら放棄している、と私には読める。サイードは、サン＝ヴィクトルのフーゴの文を文化研究の立場に演繹した。「ひとは、自分の文化的故郷を離れば離れるだけ、ことからの真の姿をとらえるのに必要な精神的な距離と寛容性を獲得することができ、ひいては自分の文化的故郷を、そして同時に世界全体を、いっそう容易に判断できるようになる。また、自分自身をも、異文化をも、その同じ親近感と距離感の組み合わせでもって、いっそう容易に査定することができるようになる」(『オリエンタリズム』平凡社ライブラリー、138頁)。

サイードのいう亡命者の方法は、自分の文化的故郷と異文化とを相互に相対化する点にある。ジャンモハメド (JanMohamed) が、これをフーコーのヘテロトピアによって説明するのは効果的である(上村忠夫『ヘテロトピアからのまなざし』未来社、2018年、57頁)。ユートピアのように現実に存在しない場所ではなく、現実の場所として存在しながら反＝場所となるもの、このヘテロトピアを通してのみ、他の現実に存在する場所が現実として認識される。だとすれば、亡命者のあり方は文化論におけるヘテロトピアだといえる。

最後に、私たちが亡命者から学べる側面は、サイードが提示した文化研究の方法としての精神の亡命にあると思われる。

鄭義が述べたように、亡命生活の不自由が、国家への忠誠の圧力に変わりうること、そこからどうしたら相対的に自律できるか、それをいかにして表象するかを模索すること、これが彼らの基本問題であり、私たちが共有すべき立場ではなかろうか。簡単に言えば、亡命者の反対側の理念に注意せよ、ということになる。つまり、専門家・専門分化には注意せよ(亡命者はたとえ専門家であっても亡命者であるということによって専門家ではなく、専門分化によって全体を見ることができなくなる)。もちろん専門家としての制度とその資格への崇拝は問題外(亡命者に資格はない)。いわゆる御用専門家や、政府側の要請に応じさせる代りに特権を与える、さらには政府側が直接雇用しようとするところからは逃げる。自由市場的なシステム(実績主義、成果偏重、売れなれば)を超える。これらの対抗するものとしてサイードが提示したのが「アマチュア主義」であった。

また、亡命を文化論として考えると、亡命の立場をアナロジーにして社会文化的な事象をとらえなおすことができる。たとえば文化大革命における下放青年は、都市から農村へ移動し、異なる文化のなかで農村の改革に努めようとした。この点で亡命のような、故郷と異郷の両面を相互に照らす性質はない。ところが、中国の下放をうけて当時の日本人がみずからの意志でおこなった下放は、都市と農村・労働現場の両面を相互に照らすヘテロトピア的な性質があり、下放した者の行動と言論によって、その反対にある都会中心の日本社会の問題点がより認識されると言えはしないだろう。

(つちや・まさあき、本会幹事、専修大学教授)

今後の研究会予定

2月例会

2月28日(木) 午後6時～

専修大学神田校舎社会科学研究所

座談会 「天安門事件の逮捕者へのインタビュー集・廖亦武『子彈与鴉片』の翻訳について」
……………及川淳子・鳥本まさき・土屋昌明

文革のもう一つの真実に迫る 多くの論点を提示する刺激的な書

書評：馬場公彦著『世界史のなかの文化大革命』

朝浩之

総合雑誌に掲載された敗戦から天皇訪中までの中国関連記事の集積に基づく大著、『戦後日本人の中国像』『現代日本人の中国像』を編んだ著者が、どのような問題意識をもって中国現代史最大の「事件」といえる文化大革命を語るのか。実は評者は大学時代に中国現代史と9・30事件を民族解放運動という観点から関連性を解き明かそうとしたことがある。史料が皆無に近く、その試みは頓挫したが、時を経て著者の問題設定に惹きつけられたのである。挑戦的と思えるのは、なんと本文全八三節のうち四二節を、一九六五年にインドネシアで起きた9・30事件（陸軍左派によるクーデター未遂事件。その後、共産党解体、華僑迫害に至る）に割いていることだ。「一〇年の災厄」といったような「一国史型文革観に対して〔中略〕国際的要因と越境性を重視したもう一つの見方を提示し、文革のもう一つの真実に迫りたい」からだと言う。

当時の中国とインドネシアの「西側の資本主義勢力や植民地化勢力と闘って民族解放を目指すという同志的結合関係」に、「平和五原則」から「造反外交」へという中国の外交政策の変化と文革との関連を重ね合わせるには興味深いものがある。しかしながら、「文革がどのように推移したのかを、中国とインドネシア、そして日本及び西側世界という三元実況中継さながらに描こうとする、これまでに他に例を見ない、同時代史の試み」において、インドネシアをここまで突出させるのは何故か。

「毛沢東は〔中略〕9・30運動失敗の教訓を活かして、一年後に発動した文化大革命では、権力内部の闘争ではなく、下からの大衆動員方式という新たな方式を採用入れた」「風上のかなたにインドネシアという、〔文革の〕ひとつの発生源を見出した」と断定することに評者は躊躇する。「二つの革命に共通することは、権力を掌握するためには、平和的移行あるいは平和共存という方法を拒んで、武力によって敵を威圧し打倒し異論を封殺するという方法

であり、そこには〔中略〕全体主義的思考がある。その思考のもとに大量死という事態が発生した」ということに注目するなら、革命における暴力の問題を正面に据え、9・30だけでなく、ベトナム戦争、ポルポト政権における大量死にも目を配るという論じ方もあるだろう。要するに、文革への9・30の影響を探るのではなく、両者に共通する問題点を探ることに、より力を注いで欲しかったということである。

9・30、文革、日本および西側諸国への影響それぞれの語りは、評者と見解を異にする論点もあるが、読みごたえのあるものになっている。一方、三元中継は必ずしも成功していないように見える。文革を軸にして影響を与えたとする9・30、与えられたとする日本と西側諸国、この位相の異なる事象を単純に「世界史のなかの」に括ったことによって「世界史のなかの」と「文革」が引き裂かれてしまったこと。さらにウォーラーステインの「世界システム論」を援用して文革を論じた一節を設けたこと。こうして、9・30のボリュームに増幅もされ、著者の問題意識が拡散されてしまったのが残念である。このあたりは各章扉のリードをたどっていくと、著者の想いとしては伝わってくるものがある。しかし新書判という制約はあったにしても、本文中でもう少し丁寧展開する必要があったと思う。

「マオの革命は、単に劣勢な社会主義勢力が優勢な資本主義勢力に立ち向かうという図式にとどまらず〔中略〕虐げられてきたアジア・アフリカ第三世界の人民が、強勢に驕る帝国主義勢力を覆そうとする、世界大の階級闘争を演出したことにあった」という歴史から何を学ぶか。いろいろと注文を付けたが、そのことは多くの論点を提示する刺激的な書であることを証左するものだ。

（あさ・ひろゆき、編集者）

〔『週刊読書人』第3265号 2018年11月16日付掲載〕

研究ノート

思想史研究の前提、立場を明らかにすること

前田年昭

思想史研究はいかにあるべきか、研究会の在り方と関連して述べておきたい。第6回例会（2016年1月28日）の討議は次のように記録されている。

〔前略〕前田は、松本が『イングランド労働者階級の形成』を引用して述べた、歴史からどう学ぶかという点について共感すると述べ、文革が序列を問い直す場であり、ひっくり返す実験の場だったのではないかと指摘した。文革における具体例として、半工半読をめぐる紅衛兵内部の路線対立を挙げた。／これに対して、土屋が、前田の発言こそ文革はこうだという決めつけであり、序列をつける考えではないかと批判し、紅五類・黒五類の序列をつくったのは文革だったと指摘した。／前田が反批判に立ち、文革の象徴として紅五類・黒五類を挙げる「定説」とは反対に、紅五類・黒五類こそが文革で問い直されたとの見方が必要と述べた。〔後略〕 [会報第1期第7号参照]

考察の拠り所としたいのは、大衆的な社会運動としての文化大革命は、はたして出身血統主義に反対して昂揚したのか、否か、ということだ。

1967年2月、首都中学生革命造反司令部主弁『中学文革報』は、北京家庭問題研究小組による「出身主義を論ず」掲載に際して次の編者注を添えた。

〔前略〕反動的な出身一辺倒主義者は、ブルジョアの形而上学のゴミ溜めの中から理論上の根拠をさがし出し、学生達を三等級、六等級、九等級などに分け、改めて社会主義制度下に、新しい衣で偽装した特権階層や、さらには反動的なカースト制度をつくり出し、人と人との間に新たな抑圧を生ぜしめようとはかったのである。一部の青年学生が、「自来紅」（生れつき赤い——訳注）という大看板を背負って、わが輩は天性の革命家であるなどと

ひとりよがりをし、その結果、修正主義の苗木となってしまったのも、この反動的な出身一辺倒主義のためである。また別の一部の青年学生が強烈な劣等感を抱き、中ぐらいの成績に甘んじるようになり、国家の前途や世界の前途に対して果たすべき責任を放棄するように仕向けられたのもこの反動的な出身一辺倒主義である。ブルジョア反動路線にごまかされている数多くの同志たちが、その過ちを固持しているのも、やはりこのためである。多くの同志が今に至るもブルジョア反動路線の前でおじけづき尻込みしているのも、やはりこの犯罪的な出身一辺倒主義のためである。〔中略〕

「北京家庭出身問題研究小組」が発表した「出身主義を論ず」は世間に強烈な反響をよび起こした。この論文が現れたことはとてもすばらしいことである！ この論文は反動的な出身一辺倒主義に破産を宣告したものであり、プロレタリア階級革命路線の偉大な勝利であった。

〔『資料中国文化大革命 出身血統主義をめぐる論争』りくえつ、1980年、pp.89-90〕

また、同時代史のすぐれた観察者・廖亦武は、老紅衛兵・劉衛東の証言として次のように記した。

文革初期、〔中略〕劉鄧路線の工作組がやって来た。工作組は学校に進駐し、〔中略〕騒ぎを起こそうとする者や、経験大交流や造反に参加した教師や学生たちを審査した。〔中略〕わしは十六歳だったが、それでも審査された。〔中略〕もともと工作組を派遣し整風を進めることは、わたしの党が延安時代から続けてきた一貫した方式で、非常に有効で効果はあった。しかし、中学高校で生徒一人ひとりまで取り調べるなんて、そりゃ度が過ぎたよ。／「親が英雄なら、子は好漢、親が反動なら、子はアホウ。革命するなら毛主席に従い、革命しないなら

消え失せろ！」などと罵倒された。まだあるぞ。「血統論」で、口汚くののしられた。こんな変なことは、おそらくあの時から始まったのだろう。／〔中略〕わしらは、どうして毛主席を崇拜したのか？ あのお方は、この工作組と対立した立場におられたからだ。彼は「司令部を砲撃せよ」で、「革命派を包圍攻撃し、異なった意見を抑えつけ、わがもの顔で得意になり、ブルジョワ階級の威風を増し、プロレタリア階級の志気を挫こうとしている」など、一つひとつ痛快に語ってくださった。まさに、この発言は、排除され、抑圧され、甚だしくは独裁下に置かれた学生たちの心を完全につかんだのだ。／毛主席が後押しされるんだ。クソッ、造反だ。工作組、党、団の指導者は官僚で、みんなをつるし上げてやがる。こいつら下級官僚が、何ごとにつけて綱領や路線をふりかざして、いつも上をだまし、下をあざむいてる。一九六一年、六二年には餓死者が出たのは明らかなのに、上にはでたらめの報告を出し、すべての情勢は大いによいなどと吹聴しやがった。〔中略〕文革は一夜にして全国で燃え広がり、工作組は追いだされ、闘争の鋒先は党委員会に向けられた。〔中略〕ちょっと数人が集まって、会合を開き、印章をつくり、紅衛兵の腕章をつけて、紅い旗を立てて街頭にくりだしていった。塩亭というちっぽけな県でも、数日で百以上の組織ができたという。当時は、すごい熱気で、お祭り騒ぎのようだった。

〔劉燕子訳『低層訪談録』集広舎、2008 年、pp.196-198〕

問われているのは、こうした史料をいかに読むのかという己れの立場である。ああもこうも読めるという、「局外」からの相対主義では不可知論に陥る。こちら側でなければあちら側なのであり、「中立」の立場などない。文化大革命の主体に対してどうかかわるのか、問われているのは視点のカナメとなっている自分自身の認識なのである。

もちろん、文化大革命は、毛沢東と党が権力を持つプロレタリア独裁のもとでの“特殊な”革命であり、国際的には米ソ共同支配の包圍下での革命だったから、現れは一樣ではなく、地方ごとに党委員会の権力関係は複雑である（その一端は、谷川真一「政

治的アイデンティティとしての「造反派」』『思想』1101、2016年1月）。「文化大革命は、はたして出身血統主義に対してどのような立場だったのか」という設定自体、抽象的にすぎるとの批判もあるやもしれぬ。しかし、そのような批判に対しては、とりあえず、「固有の問題設定と分析のための論理的次元」を区別し得ぬ「方法論音痴」（安丸良夫）といっておこう〔『〈方法〉としての思想史』校倉書房、1996〕。

では、立場を明らかにするとはどういうことか。先学につこう。西順蔵らが『原典中国近代思想史』全6巻（岩波書店、1976-1977）を編むに際して明らかにしたように。

思想史として骨組を作る際、われわれは思想と運動との相関関係を重視した。現実の人民の運動から遊離した学術的業績や論壇・学界内部の論議は直接の対象とはせず、人民の運動に触発されて生れ、その課題を明らかにし、前途を切り拓こうとする思想であるか、あるいは、人民の運動に敵対する思想、その課題を隠蔽し、方向をそらそうとする思想であるか、という対抗を考え、特に前者を基軸として思想史を構成しようとした。

〔「総序」第1巻、pp.viii〕

原典中国近代思想史の会の名によるこの「総序」は編者代表・西順蔵の手になるものと思われるが、滅びゆく階級ではなく興りつつある階級の立場に立つことが明示されている。

なぜ立場の問題が、基本的で、根本的で、土台になるのかといえば、それが方法や観点をも貫く問題だからである。拠って立つ立場によって、みえてくる光景が違って来るからである。

映画『星火』で星火メンバーである向承鑑が兄に言う。「僕の目を見てよ、目は光っているでしょ？ 兄ちゃんが見える物は僕も見える。でも僕に見える物は兄ちゃんには見えない。それが僕たちの違いだ」

出身血統主義は、劉鄧らによる差別選別教育路線として1950年代から民衆の怨嗟的になっており、それゆえ、文化大革命で大衆的反撃が一気に燃え上がった、私はこの認識に立って文化大革命を見る。

〔まえだ・としあき、本誌編集、神戸芸工大教員〕

研究ノート

胡傑『私が死んでも』と文革の謝罪の問題

土屋昌明

はじめに

胡傑監督『私が死んでも』（『我虽死去』2007年、70分）は、1966年8月に北京師範大学附属高校の党総書記で副校長だった卞仲耘が、紅衛兵の集団リンチに遭って殺害された事件（以下、卞仲耘事件と仮称）を扱っている。彼女の夫である王晶焱は、自分の妻が学生によって殺害されたことを聞き知り、すぐさまカメラを購入して、死んだ妻の有様や家族の様子、殺されるに至るまでの一家の境遇などを写真に撮っていった。本ドキュメンタリーは、彼へのインタビューと彼が提供した写真を主たる素材として構成されている（シナリオについては本誌に連載中である）。

この作品は、一般の劇場公開はもちろん、DVDの販売もおこなわれなかった。しかし、DVDのコピーとインターネットへのアップロードによって、非常に多くの視聴者を得た。この点について胡傑監督はこう述べている。「この映画（『私が死んでも』）は非常に広く流通しました。私がこれをDVDにしてから、友達に送ったのですが、彼らは見てから、文革のことを映画にした人がいると口コミになり、彼らがコピーを作って友達に配ったのです」と述べている（土屋昌明「中国の「民間ドキュメンタリー」とはなにか—胡傑監督へのインタビュー」『専修大学社会科学研究所月報』No. 598、42～67頁、2013年4月20日）。その結果、作品中でとりあげられている加害者やその友人らが、みずからこの作品を見するという現象が生じた。彼女たちの行動と言説をみることから、本論では文革における謝罪の問題に初歩的な検討を加える。

一、本作と当事者の接触

本作は、殺害された卞仲耘の遺体の状況から入り、どのようにして紅衛兵の集団リンチに遭うか、瀕死

の彼女がどのように病院に運ばれたか、紅衛兵の暴力はいかなる社会背景のもとではびこったか、といった問題を、当事者や関係者の証言と関連史料・当時の映像などを使って解読していく。未発表の証言や写真だけでなく、当時の実物資料や檔案資料なども映し出されている。事件の関係者が見れば、いろいろ記憶を想起させられるはずである。これについて胡傑はつぎのように述べている。「映画を作ったあと、宋彬彬（事件当事者の学生リーダー）たちは集会をしたので、私も参加しました。彼女らは私のドキュメンタリーについてなら注文しないところか、感動し、ある人などは、校長先生が殺されたドキュメンタリーを撮ってくれてありがとう、と礼をいきました。宋彬彬は釈明をしました。自分が殺したんじゃないし、自分が指揮したんじゃない、と私に釈明したのです。私は彼女にこういきました。「でも、以前に取材を申し入れたときは、あなたがたからは断られましたよ」。私は電話で取材を申し入れたことがあります。そのとき彼女らは、忘れたとか、用事があるとか、忙しいとかいって、取材を受け入れませんでした。だから、この映画では、当時の学生は誰もインタビューを受けていない。いろいろな人間関係とか教師だった人から紹介され、当時の学生を探しだして、インタビューの予定をしても、一晚経つと、インタビューを受けないといってきました。みんな恐れているのです。彼らの仲間はみな指導者の立場にあり、もし本当の事情を話したら、どうなるか？だから、この映画で私がインタビューできた人は非常に少ない」（土屋前掲論文）。

この話から、第一に映画を見たもと学生たちは感動と精神的ショックを受けたこと、第二にそれ以前はこの事件について言及すらしていなかったこと、第三に胡傑がインタビューを申し入れた段階でも反省する考えはなかったこと、第四に過失に直接向かい合う勇気の問題だけでなく、彼女らの政治的立場

の問題があったこと、などが理解できる。

第一について、卞仲耘事件の当事者たちは、本作のコピー版をとこから入手して見たようである。それによって当事者同士が意思疎通をした。さらに進んで、意見交換のための集会を開いたのである（しかもそこに胡傑監督を招いた）。つまり、事件について釈明や記念の動きが生じたことがわかる。

当事者たちが本作を見たことについて、2010年4月28日に発表された座談会で、学生リーダーの一人である劉進は次のように語っている。「数年前、胡傑の映画で卞仲耘の家に貼られた壁新聞を見たが、言葉の粗暴さとあくどさは、目にするに堪えなかった。同級生をつかまえてそのときの状況を聴いたら、確かに袁淑娥が学生をひきいてやらせたとわかった」。この座談会は、馮敬蘭が司会をし、劉進・宋彬彬・于矜・葉維麗が参加した（啓之主編『記憶』2010年4月28日第7期、総47期）。正確な日時は不明だが、2010年の段階で「数年前」というからには、おそらく胡傑作品が出てすぐに劉進は映画を見たのだ。

しかも、当事者たちは、映画の描き方に対して反感や意見を持つより、感動を催したという。同じ座談会の司会である馮敬蘭は、次のように語っている。「卞校長の遺族である王晶壺先生は、多年にわたって（袁淑娥を）裁判に訴える権利を堅持した。胡傑が制作した映画『私が死んでも』では、王先生が苦心して集めた物証と資料が集中的に映し出されている。私は子どもたちが母親（卞仲耘）の遺体のかたわらにいた写真を見たとき、涙があふれ出るのを禁じ得なかった」（同前）。

これは、胡傑作品の演出にかかわるだけでなく、主人公の王晶壺氏の歴史事実を明らかにしようとする執念にもかかわっている。本映画を見た葉維麗はこう語っている。「卞校長の遺族として、王晶壺氏は想像しがたい危険な条件下で、自分の妻のために、またすべての文革受難者のために、命がけの証拠を残した。胡傑の映画のなかで卞校長の当時の衣服を一つ一つ取り出すシーンに、私は感動だけでなく、尊敬も感じた」（同前）。

とはいえ、彼女らの話し方には、当事者意識が薄いようにも感じられる。というのは、袁淑娥は女子学生ではなくて別の学校の職員であり、袁淑娥によ

る卞仲耘への暴行は、彼女らの指導下でおこったことではなかったからである。

第二に、本作以前に彼女らは、この事件の加害について語る機会があった。たとえば、ドキュメンタリー『八九點鐘の太陽』（2003年、Long Bow Group制作、卡瑪[Carma Hinton]、白杰明[Geremie Barmé]、高富貴[Richard Gordon]らが監督）には、宋彬彬が顔を隠して登場し、1966年8月、天安門上で毛沢東に紅衛兵の腕章をつけた事情を語っている。彼女はその場で毛沢東から名前を聞かれ、宋彬彬だと答えたと「武が必要だな」と言われる。この様子はニュース映像に撮られて全国に流され、プロパガンダ映像にも使われて、彼女は一躍有名人になっただけでなく、紅衛兵の模範として、彼女の暴力行為までが喧伝されたのだった（本人の言によれば、喧伝されたような暴力行為はしていないとのことである）。これによって彼女の人生は、時代の変化に翻弄されることとなった。このインタビューでは、彼女は被害者の立場である。加害者と思われていた人物がじつは被害者だったという点にこの映像の掘り下げがある。そのためか、卞仲耘事件については一言も語られていない。

第三に、胡傑の話によると、当事者たちは本作を見たことによって、事件に対する反省を始めたように受け取れる。実は、本作以前に卞仲耘事件については、もと学生たちがまったく口を噤んでいたわけではなかった。この点は、劉双の整理になる「卞仲耘案文献資料索引」が参考になる。この整理では、当事者とその関係者だけでなく、被害者や目撃者による言及も入っているので、本論では当事者とその関係者だけをとりあげる。

1986年、王友琴（師大女附中高一三班学生）が「女性的野蛮」という文を発表。のちに『女博士生校園隨筆』（北京出版社、1988年）所収。

1995年、王友琴「1966：学生打老師的革命」を香港『二十一世紀』に発表。そののち、王友琴は台湾『中国時報』に「八月祭」を発表。

1996年、馮敬蘭（女附中老三届学生）が「記憶的傷疤」を発表。この文はのちに『那個時代中的我們』下冊（者永平主編、遠方出版社、1998年）所収。

1999年、羅点点（師大女附中老三届学生）が『紅色家族檔案——羅瑞卿女兒の点点回憶』（南海出版公司出版、1999年）を出版。

2000年、王友琴が「網上文革受難者紀念園」を設置、千人にもものぼる受難者の略歴を姓名のピンイン順に配列。そのなかで「卞仲耘」が最も長い（約2万字）。

2001年、伏生（師大女附中老三届学生）の文「那天、我是殘殺卞仲耘的目擊者之一」が王友琴のネットページに発表された。

2004年、王友琴が『文革受難者——迫害、監禁と殺戮的尋訪実録』（香港開放出版社、2004年）を出版。全書52万字。「卞仲耘」は最長的一篇。

2006年、裕雄が「良知と責任——記念卞仲耘校長殉難四十周年」（『炎黄春秋』2006年8期）を発表。

2006年、王友琴が「八月、讓我們記念受難者」で「四十年になった。卞仲耘の死は忘却されてはならない。8月5日という日は、文革受難者の日とすべきだ。中国人はこの記念日から歴史と正義と道徳を学ぶことができるだろう」と提案。

2006年、葉維麗が中国語と英語の文章を発表。中文版の題目は「卞仲耘之死」（周子平訳）、署名は「白芳」、この文は「二閑堂」というホームページに発表された。英文版の題目は「The Death of Bian Zhongyun」、署名はWeili Ye、この文は『The Chinese Historical Review』Volume 13、Number 2、Fall 2006に発表された。

このうち、王友琴は早くにアメリカに移り、中国現代史を専攻して独自の調査と活動をしていた。つまり、一部の学生たちはさきにこの事件の回顧と調査を始めていて、そこに胡傑作品が触媒となって、大きな動向を生んだのである。

第四に、彼女らの政治的立場の問題がある。この学校は、天安門広場および中南海（高級幹部の居住地）から1キロ足らずの場所にあり、文革前に北京の「重点中学」となった。このため、中共の高級幹部のむすめが多く入学していた。たとえば、毛沢東の二人のむすめ李敏と李訥は、文革以前にこの中学を卒業している。文革開始時には、劉少奇のむすめ劉婷婷、鄧小平のむすめ鄧榕が在学していた。鄧榕

は、卞仲耘が死亡した直後に病院におり、医者に対して検屍のための解剖をするよう迫ったとされている（暴行を隠匿するためとも思われる）。宋彬彬は、中共中央東北局第一書記の宋任窮のむすめであった。このような人物たちの暴行や殺害行為は、当時から現在にいたるまで、法的に処理されることはなかっただけでなく、事実が明らかにされることもなかったのである。

二、記憶と事実

本作で語られる記憶は、それまで明らかにされてこなかったことではあるが、無条件に事実だとすることはできない。この点は、反省のための基礎でもあり、当事者たちは真剣に検討している。事件を目撃した重要証言者は二人おり、そのうちの一人である、当該校の職員だった林莽の語りの価値は高い。それは次のようである。

「ああ、彼女ら（女子学生たちに攻撃されていた女性教職員）の顔は真っ黒で、歯だけが白く、ほかは顔中真っ黒だった。（胡傑：墨汁を塗ったのですね？）墨汁だよ！ 眼だけが何とかわかるくらいで、あとは歯だ。大声で叫ばせていた。声が大きくなないと、すぐに棍棒で殴るんだ。声が大きくなければ許さない。「大声で言え！」と言っては、棒で突く。（胡傑：女性教職員たちは何と行っていましたか？）「私は走資派です！ 反革命修正主義です！ 批判されるべきです！ 死ぬべきです！」というようなことだ。私はこの耳で聞いたんだ。ときには「私はこの犬みたいな頭を打ち砕かれるべきだ！」というような言葉も。しかも、ひとこと言っては洗面器で叩かれ、ほうきで叩かれていた。卞仲耘は地面を掃く鉄のほうきで叩かれていた。胡志濤は洗面器で叩かれていた。はっきり覚えている。（胡傑：周りは学生が何人かついていた？）紅衛兵以外、教師たちは一人も出てこようとしなかった。誰も出てこなくて、彼女たち（卞仲耘と胡志濤）だけ。私はあ那时候、実験棟に身を潜めていた。図書室の窓からこっそり見ていたんだ。こんなシーンがあって、今でも覚えていて本当に驚いたんだが、その女子紅衛兵は背が高く、「永遠に立ち上がれないようにしてやる！ こいつの身体を足で踏みつけてやりたい！」と言って、本当

に彼女を踏みつけにしたんだ。そんな状況だった。(胡傑：そのとき、彼女は倒れていたのに、さらに踏みつけにして「永遠に立ち上がれないようにしてやる」と?) そうだ。(王晶焄：何を履いていた?) 軍靴を履いていたんだ。数日のあいだに様変わりしてしまった。女たちは服を変えていた。何を着ていたかというと、黄緑色の軍服、解放軍の軍服だ。足に履いているのは、スエードの軍靴だった。軍人が履く靴だ。そんなので人を蹴っていた。「彼女の服には血痕があった。そのときはどういふ原因かわからなかったのだが、事後にわかったのは、見せしめのつるしあげのときに、紅衛兵たちが棒で殴ったときに、棒には釘が打ってあったんだ。「私がほうきを渡そうとしたとき、まだ受け取る前に、彼女はこの壁から滑り落ちて、地べたに倒れ、地べたに倒れると気を失ってしまった。すると女子学生がこう罵倒した、「死んだふりか。さっき運動場でも死んだふりをしたが、また死んだふりだな」と。「それでも彼女は意識が戻らなかったの、水は続けてかけなかった。私はこの目で見たんだ。ほどなくして、また私が呼ばれた。どうするのかというと、女子学生宿舎の入口に行かせた。彼女はすでに運ばれていた、誰が運んだかわからないが、宿舎入口の階段に運ばれて、そこに寝かされていた。どこかの作業員が運搬用の荷車を持ってきて、その作業員の年寄り、卞仲耘を車に乗せろと言われた。私は両足を持ち上げたが、靴は両方とも中まで水浸しだった。彼女はまだ息があり、黒目がひっくりかえって、上目になって、白目がむき出しだった。口からは白い泡が吹き出し、血が混じっており、痙攣していた。「両足を持って持ち上げると、わははは……と、そこにいた女紅衛兵たちがみんな笑った。誰を笑ったのか? 死者を笑ったのではなく、私を笑ったんだ。そのときわかった、生きている右派分子が死んだ走資派を持ち上げていると嘲笑したわけだ。生きている右派分子に、死んだ走資派を持ち上げさせると……」

まるで昨日目にしたことのように細部まで叙述し、時間の前後関係も明瞭である。最後に林莽が、自分に向けられた女子学生たちの哄笑を語るあたりは、捏造や記憶違いなどでは有り得ない迫真性がある。しかも林莽は、窓のかげから隠れて観察していたの

だから、学生たちは林莽の存在を知らなかった。このような証言は、当事者の学生たちをさぞかし驚かせたことだろう。

しかし林莽の証言に対して、もと学生から疑念が提出された。馮敬蘭は、自分は当時そこにいなかったとしながらも、当時の学生は紅衛兵の服をまだ着ていなかったのであって、赤衛隊員の服は膝までの短パンで、しかもそのころは非常に暑かったから、革靴などはいていられなかったという(馮敬蘭「我为什么要替宋彬彬说话」『記憶』2010年5月23日増刊、総第49期)。つまり林莽の証言には、あとで知った事柄やイメージが混入していることを指摘している。彼の証言を完全否定はできないが、裏打ちする別の考証が必要なのである。

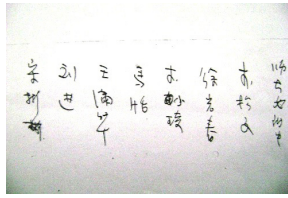
林莽は1917年生まれで、1940年代に作家として名を立て、1950年に中央戯劇学院教授、1952年に胡風事件に巻きこまれて1年投獄され、釈放後、北京師範大女附中で国語教師を担当したが、57年に極右とされ、創作は許されず、図書館の資料員をしていた。文革が始まると迫害を受け、便所掃除をさせられた。胡傑のインタビューを受けたとき、すでに90歳だった。2006年に胡傑からインタビューを受けたときに、目撃したことを文に記している(林莽「目撃并身历其境者言——纪念卞仲耘校长殉难四十周年」)。当該文は中国国内では発表できず、海外で発表したようだ。彼はその数年後、2012年に亡くなっている。

もう一つ別の例。卞仲耘が病院に担ぎ込まれ、王晶焄が病院に到着したときに、そこにいた学生のリストが本作で示されている。王晶焄がこう述べる。「革命委員会のメンバー数名が来ていた。責任者は、革命委員会のメンバーだった。ほら、師範大学付属女子中学・高校、これが原本だ。李松文、この人だけが教師だ」。画面の原本は手書きで、字幕も出ないため、詳しくは読めないが、文は縦書きで右から「師大女附中 李松文 徐岩春 李小琦 馬恬 王滿華 劉進 宋彬彬」とある。つまり、卞仲耘の死んだ直後に、遺体のまえに来ていたメンバーの名前が画面に出てくるわけである。

この資料は、もと学生たちには驚くべきものだったにちがいない。劉進は「王先生が出したあのリス

トは、胡傑の映画で初めて見た」と述べている（「不要让文革成为演义（之二）」2010年5月21日、<http://fengjinglan.blog.sohu.com/152084739.html>）。

本作では、この資料は誰がどういう理由で書いたものか説明がない。



それに、王晶焄が述べるように、本当に事件当日のものなのか裏打ちもない。これについて劉進が次のように述べている。

「のち2008年に、あるブログで再び目にしたが、下手人はこのなかのいると指弾していた。ある同級生があこのリストを見たあと、あれは李松文先生の書いた字だと言った。李先生は彼女のクラスで幾何学を教えていたから、李先生の字体をよく知っていたのだ。そこで私は李先生を探しに行き、教えてもらおうとした。リストのコピーを渡して、当時の状況を思い出すようお願いした。数日後、李先生から電話があって会うことになり、リストが書かれた原因とその後を詳しく話してくれた。彼の話はこうだった。8月5日、事件があった日、彼は子どもを医者に見せにいき、学校にもどったのは6時近くになった。事件がおこったと聞いて、裏庭に行こうとすると、数名の学生がふさいで行かせないようにした。そのとき彼は、趙桂英先生や校医の劉先生などを慌てて探した。医院に行くと、医者は救護しようとしなかった。その場にいた教師と学生は、医院の人と言い争いになった。医者が言うには、学校の証明がなければ救護できないと。もう時間が遅かったので、どこで公印をもらって証明がとれる？李先生が医者、サインでは証明にならないかときいた。医者が言うには、学生のサインではだめだ、学生は卒業したら探せないから、書くなら先生が書くことだと。そこで、李松文先生が一枚の紙に縦書きで校名の師大女附中と書き、それから自分の名前を書いた、ということだ。そのときその場には、ほかの先生や学生も少なくなかった。サインとなると責任を負うことになるので、李先生は高学年の学生数人に、きみたちの名前を書いていいかと尋ねた。私たちがいいですと答えると、李先生は見知っている学生数人の名前を書いた。李先生はちょうど高二を教えていた

から、高2の学生が3人、李小琦・馬恬・王滿華、私・宋彬彬・徐岩春が高3だった。李松文先生が言うには、これは救命措置をするまえに私が医者にしたリストだが、どうして王先生の手元にあるのかわからない、たぶん医院が彼に渡したんだろう、とのことだ。またこうも言った。「このまえきみがリストを私に見せたとき、一目で自分の字だと思って、ぎょっとした。家に戻ってから思い出してみても、この過程を覚えていた」と。卞先生が亡くなってから、だいたい9時か10時ころ、大多数の人はみんな帰宅した。私は（この件を上層に報告するために宋彬彬らが行った）北京飯店には行かなかった」。

この劉進の説明で、本作に映る資料の信憑性が証明されたことになる。と同時に、このリストに書かれた名前は、事件に直接関わるとは限らないことも証言されたことになる。

三、謝罪

胡傑の作品以前に事件に対する反省がおこなわれていたが、王晶焄氏に謝罪する行為に向かうのは本作の影響であろう。葉維麗はこう語っている。「生命に対する軽視は私たち世代の問題であり、私はこの世代の一員だ。いま話してきたことは、決して外側あるいは高所から他の人を責めているわけではなく、深い自責の念を含んでいる。胡傑の映画を見たとき、穴があったら入りたいほど恥ずかしかった。はじめて王晶焄先生に会ったとき、「女附中の学生として、罪を感じています」と申し述べた。これは本心からの言葉だ」（同前『記憶』所収の座談会記録）。王容芬によれば、本作がインターネット上にアップロードされると、当時の学生二人が王晶焄の家を訪れ、王晶焄も感動して応対したという（王容芬「为历史作证——评胡杰获奖纪录片『我虽死去』」『华夏文摘增刊』文革博物馆通讯485、增刊第653期、2008年6月11日出版、<http://www.cnd.org/CR/ZK08/cr485.gb.html>）。

2014年1月14日、『産経新聞』が「元紅衛兵 相次ぐ謝罪 習政権の毛沢東路線反発」という記事を掲載した。それによれば、2014年1月12日、元紅衛兵の宋彬彬が母校を訪ね、紅衛兵による被害を受けた教員や生徒に謝罪した。2013年くらいから、文革の

加害者たちが次々と名乗りをあげ、当時の罪を謝罪する動きがあったという。陳毅のむすこの陳小魯が2013年10月、母校の北京第八中学校を訪れて、かつての教師に謝罪した。陳が進めた暴力で、同校教師二人が自殺、一人は障害が残る重傷となった。宋彬彬は有名であっただけに、彼女の謝罪は大きなニュースになった。『産経新聞』は紹介していないが、この謝罪に対し、王晶焄は「虚偽の謝罪は受け入れられない」との声明を発表した。王晶焄の声明文によれば（RFI 世界之声に原書コピーあり）、本稿でとりあげた劉進が宋彬彬と行動をともにしている。彼女らの行動が虚偽の謝罪だと王晶焄がいうのは、二人が「効果的に止められなかったこと」「しっかりした保護ができなかったこと」「基本的な憲法の常識や法律の知識に欠けていたこと」を理由にして、みずからの当時の罪責を逃れているからである。事件の真相を当事者たちが明らかにするまでは謝罪を受け入れられないと言っている。胡傑によれば、このとき胡傑は王晶焄に電話して話を聞き、宋彬彬が王晶焄に会わなかったことを確認した。

宋彬彬らの謝罪は、彼女が習近平らに近い特殊な人物であることから政治的な憶測を呼んだ。しかし、彼女の周辺では、この謝罪の10年以上前から当時の行為の反省と事実の確認に対する動きが始まっていた。とくに劉進の積極的な態度が宋彬彬を動かしているようにも思われる（2014年の謝罪でも行動をともにしている）。胡傑の作品は彼女らの反省と事実確認の後押しとなるとともに、謝罪への流れを作った。上述の分析から、彼女らが謝罪へ動くためには、被害者の心情や苦悩だけでなく、個人的な怨念を超えた社会正義に対する理解と共鳴が必要だったことがわかる。胡傑の作品が、王晶焄の社会正義に対する理想主義を描きだしていたことが彼女らを動かしたのである。その一方で、当事者たちが事実を

明らかにしないのでは、謝罪は意味をなさないが、その当事者たちの政治的な背景が事実を明らかにさせない。そこには権威主義に対する人々の付度も働いているのであろう。歴史を明らかにしえないことが、謝罪によって人々の罪責の念を払うことも、被害者の心の傷を晴らすことも実現の方向に行かせない、ということなのであろう。

追記

下仲耘事件について詳しく述べたのは、上述の王友琴の2004年の本である。該当部分は、王友琴・小林一美ほか共編共著で『中国文化大革命「受難者伝」と「文革大年表」』（集広舎、2017年4月）に邦訳がある。一読、当時の学生リーダーだった宋彬彬に下仲耘の死の責任があるように書いている。たとえば「八月一八日の大会で、天安門楼に上り、最も注目を浴びた彭小蒙と宋彬彬の二人は、前者は初めて北京で教師を学生に暴力を振るい、迫害を始めた北京大学附属中学の生徒であり、後者は最初に学校長を打ち殺した北京師範大学附属女子中学の生徒であった」とある（76頁）。ただし当該部分の現在みる原文は「在8月18日大會上，在天安門城樓上最為矚目的兩個紅衛兵宋彬彬和彭小蒙，一個來自打死了下仲耘的北京師大女附中，一個來自北京最早開始用暴力毆打折磨老師和同學的北京大學附屬中學」となっており、宋彬彬は当該中学から来たと言っているのであって、彼女が殺害したと述べているわけではない（http://ywang.uchicago.edu/history/big5/Bianzhongyun_text2.htm）。

この論文を読むと、胡傑作品が王友琴の説に多くよっていることがわかる。そのため、胡傑作品でも同様に宋彬彬に責任があるように感じられる。これについての宋彬彬の釈明と謝罪は、早くも2007年12月に書かれており、次号で紹介したい。

宋彬彬の謝罪の背景と結果・影響についての学術的な議論としては、Susanne Weigelin-Schwiedrzik and Cui Jinke, “Whodunnit? Memory and Politics before the 50 th Anniversary of the Cultural Revolution”, edited by Patricia M. Thornton, Peidong Sun and Chris Berry, *Red shadows : memories and legacies of the Chinese Cultural Revolution*, Cambridge University Press, 2016. がある。この論文では、2014年1月の宋彬彬の謝罪の流れ、これに対する批判をとりあげ、1966年当時に造反派に属した人々がこの機に高級幹部の子女を批判することで、中共の1981年の文革否定の決議を否定し、文革に対する積極的評価をおしひろげようとしたとみている。彼女たちの記憶とそれへの批判の応酬は、文革の派閥的な闘争の延長だというのである。

胡傑監督『私が死んでも』字幕（その4）

土屋昌明 編訳

[前号からのつづき]

76



王晶焱：取骨灰没有地方安置，因为当时是黑帮，敌我矛盾呢。

胡杰：当时你把这小小的灵堂就是放在书柜里的是吧？

王晶焱：唉，对。

王晶焱：当时一关上以后，人家一看就是书橱，书橱外面挡着，人一不在的时候就打开，把它伪装起来。

胡杰：就是这个书柜是吧？

王晶焱：就是这个书柜。

胡杰：这个小小灵堂在书柜里放了几年啊？

王晶焱：总有三、四年吧。

胡杰：就是放在这里。

王晶焱：在这里，放在这里。

王晶焱：遺灰を持ってきても置いておく場所がなかった。当時（彼女は）黒いグループであり、人民の敵だから。

胡杰：それで小さな祭壇をこの書棚の中に作った？

王晶焱：そうだ。

王晶焱：当時、扉を閉じれば、書棚の外側がふさがって、ちょっと見ても書棚にしか見えない。人がいなくなったら開ける。そうやって偽装したんだ。

胡杰：これがその書棚？

王晶焱：そうだ、この書棚だ。

胡杰：この小さな祭壇は何年くらいここに置いてあった？

王晶焱：3、4年くらいだ。

胡杰：ここに置いてあったわけだ。

王晶焱：そうだ、ここに置いてあった。

77



王晶焱：就是这个窗口是我的书房同我的卧室的房间。在文革以前，早晚在她离家，还有下班回家的时候，我就经常张望，看她回来了没有，看到回来就很高兴，走了以后也知道上班儿。她遇难以后，就这个窗口啊，就是我的，这个，空空的盼望啊，然后在她牺牲以后，我的二女儿同四女儿两个人经常跪到我的床上，看望我，就是这个窗口。就是这样，就是想念她。指望经常看到她。幻想啊，她是不是能回来。

王晶焱：この窓、私の書斎兼寝室の窓なんだ。文革前は、

彼女が出勤するときや帰宅するとき、いつもここからのぞいていた。戻ったかなと思って見る。戻ってくる姿が見えると嬉しく、出かけと出勤したなど。でも彼女が受難してからは、この窓は、私の、この、空しい望みにすぎなくなってしまった。彼女が犠牲になったあと、次女と四女の二人はよく私のベッドに上がって、私を見ていた、それがこの窓だ。そうやって、母親を恋しがっていた。いつも一心に母親を見たいと待っていた。戻ってくるんじゃないかと夢見ていたんだ。

78

画外音：四十年后，我找到了那位写匿名信的善良的女教师，她已经 75 岁了。她给我讲述了当年卞仲耘校长被打致死的前前后后。但是她没有同意我为拍摄纪录片的录音和录像，她说：还不是时候。

ナレーション：40 年経って私は、あの匿名の手紙を書いた善良な女性教師を探し出した。彼女はすでに 75 歳になっていた。卞仲耘校長が当時殴り殺された前後のことを話してくれた。しかし、ドキュメンタリー映画の録音と録画には同意してくれなかった。まだその時ではない、と言った。

79



胡杰：这个学校是不是领导干部的孩子特别多啊？

王晶焱：唉！对，而且是中共中央几个常委的女儿或者是侄女、孙女都在这个学校上学，实际上可以说这个学校是一个皇家女校。

胡杰：この学校は指導者や幹部の子供が多かったのでは？

王晶焱：そうなんだ。しかも中国共産党中央委員会常務委員の娘や姪、孫娘もこの学校に通っていた。実はこの学校は皇族女学校といえる。

80



王晶焄：老二、老三去北大荒，孩子们走的时候，我们都让孩子们向妈妈告别。

王晶焄：次女と三男は黒竜江省の北大荒に行った。子どもたちが出発するとき、私は母親に別れを告げさせた。

81



王晶焄：我是一个激进的民主主义者。在当时来讲，我之所以往枪口上冲，就是为争取民主，而好多人都是这样。

王晶焄：抗日战争后期，我从重庆转学到了成都的燕京大学，我同一些失去关系的地下党员联系了以后，我们逐步地就在成都组织了一个青年革命团体，首先是几个人，名字叫蓉社。其中就有卞仲云。1944年，我在成都美国新闻处主编了一次时事图片展览，进行反法西斯战争、宣传民主的展览会。我当时拍了一部分照片，图片展览里首先宣传反法西斯战争的胜利，同时，鼓吹民主，反对国民党的一党专政。这个展览会在成都是空前的。这是那次展览会的主会。

王晶焄：大横幅，就宣传民主嘛，大横幅就是用大西洋宪章上面的原罗斯福那段话，其中有一句话：“要有各种自由，要有免于恐惧的自由。”就是反法西斯。

王晶焄：这个就是李慎之，李慎之就是当时参加了双十二运动，同国民党四川省政府谈判的代表团的负责人。我后来上大学，先上了复旦大学，复旦大学新闻系，学新闻是什么目的了，我并不想做新闻工作，当时就想做，搞职业革命，以革命为职业，新闻系没课程，没多少课程。到了成都以后，进了燕京大学，燕京从北京去，五四传统民主去了，去了以后，这个是一个教会学校，这个时候开始受到教会的影响，我不信，我并不信，我是无神论者，不信呢。但是宗教的精神，那风气我受感染。

胡杰：什么风气呢？

王晶焄：理想，对不平，对世间的平。后来我的家里到处都是基督教的绘画，就是耶稣受难。这个圣母子，当时我非常欣赏它，非常动人。

胡杰：你当时感觉到了什么呢？

王晶焄：两对眼睛。里边表现了人类最深层的爱。最

后的晚餐就人的背叛。

王晶焄：私は急進的な民主主義者だ。当時においては、私が銃口に向かって突き進んだのは、民主を勝ち取るためだった。多くの人がそうだった。

王晶焄：抗日戦争の後半時期に、私は重慶から成都の燕京大学へ転校した。連絡が途絶えていた地下党員たちと連絡を取り、成都で徐々に青年革命団体を組織した。最初は数名で、蓉社という名前だった。その中に卞仲耘もいたんだ。1944年、私は成都のアメリカ新聞処で時事写真展示の編集を主幹した、反ファシズム戦争を前進させ、民主を宣伝する展覧会だ。私は当時、写真をいくらか撮っていて、それで展覧会ではまず反ファシズム戦争勝利を宣伝し、同時に、民主を鼓吹し、国民党の一党独裁に反対した。こうした展覧会は成都では初めてだった。これはその展覧会のメインシンボルだ。

王晶焄：横断幕は民主を宣伝するだろう、だから大西洋憲章にある、もとはルーズベルトのあの言葉を引用した。「様々な自由が必要であり、恐怖から解放される自由が必要だ」。つまり反ファシズムだ。

王晶焄：これが李慎之だ。李慎之は当時「双十二運動（成都市中事件、1944年）」に参加していて、国民党の四川省政府と交渉する代表団の責任者だった。その後、私は大学に入り、最初は復旦大学のジャーナリズム学部だった。ジャーナリズムを学ぶのはどうしてか、ジャーナリズムの仕事がしたかったわけではなく、当時は、職業革命家をやろう、革命を職業にしようと思った。ジャーナリズム学部は履修科目があまり多くなかったんだ。成都に行ってから、燕京大学に入った。燕京大学は北京から疎開していた、つまり五四運動の民主が来ていた。そこへ行ってから、そこはキリスト教系の学校だったから、教会の影響を受けはじめた。私は信仰はしない、無神論者だから、信仰はしない。しかし、宗教の精神というか、あの雰囲気から影響を受けた。

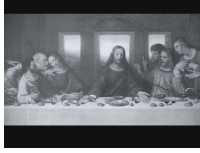
胡傑：どんな雰囲気？

王晶焄：理想、不平等に対する理想だ。それからは、私は家のあちこちにキリスト教の絵を飾った。これは『イエスの受難』。これは『聖母子』。当時とても大好きだった絵だ、感動させられる。

胡傑：当時はどんなことを感じたのですか？

王晶焄：二人の眼、そこには人類の最も深い愛が表現されている。『最後の晩餐』は人の裏切りについて。

82



胡杰：卞老师去世以后，你好像一直生活在那个记忆当中？这么多年来。

王晶焄：记忆中。我身上背着十字架，什么十字架？这样的一个典型的事件，一个惨案。我认为是个人的问题，个人的生命，一个家庭的毁灭，或摧毁吧，但不仅仅是个人问题。耶稣上十字架的时候，自己扛着十字架。我这四十年来，我是在帮着扛着十字架，我现在还扛着。这样一个历史事件，我有责任，只有我有责任，包括我的孩子在内，他们所理解的，所感受到的，所想到的都不能同我一样。因为我是亲身经历者。如果我不把这些真相揭露出来的话，那就是我没有尽到责任，用我一句话，我就白活了。这是我的不可推卸的责任。

胡杰：卞先生が亡くなってから、あなたはずっとその記憶の中に生きてきたようだ。

王晶焄：記憶の中で、私は十字架を背負っている。

何の十字架か？このような典型的な事件、悲惨な事件でも、個人の問題だとは思う。個人の生命、家族の崩壊あるいは破壊。とは言え、たんに個人の問題であるだけではない。イエスは十字架にかかるとき、自ら十字架を背負った。この40年来、私は自ら十字架を背負い、いまでも背負っている。この歴史的な事件について、私には責任がある、私だけに責任がある。私の子供たちにしても、彼らが理解したこと、感じたこと、考えたことは何一つ私と同じではない。なぜなら私はこの身をもって体験したからだ。私がこの真相を明らかにしようとしなかったら、私は責任を果たさなかったことになる。自分の言葉で言えば「無駄に生きた」ことになる。これは、逃れることのできない責任なんだ。

83



门牌：中国社会科学院昌运宫宿舍

表札：中国社会科学院 昌運宮宿舍

〔次号につづく〕

〔(5) ページからのつづき〕

れて革命運動に入った人で、革命のベテランですから、相当の年配です。造反派の人は十代、二十代、あるいは三十代の人が多いですね。そこで、われわれとしては自己批判した人がどういう顔付をしているかが興味があって、かれらの表情あるいは言葉を注意してみました。かれらは、自分たちは若いものに今さら批判されるのは心苦しい、いやである、自分はさんざん革命のために働いて立派な業績を残したから、こういう地位についたのであって、しかも何一つ誤りを犯したつもりはなかった。会社も工場も立派に成長していた、そこへ若い連中がもう一回自己批判しろと言って、わたしは実にいやだった、第一照れくさくて、若いもの前で、わたしは悪かったなどと言えたものじゃない、そういう気持だったと、社長なり工場長なりが言うのです。

ぼくらにしても、もし若い人にそういうふうと言

われたら、相手が生意気であって、自分の地位に取って代りたいから批判するのだろう、そう思わざるをえないし、やつらに比べて自分がはたして劣っているかどうかということで怒ると思うのです。実際かれらも怒ったと言うのです。

かれらが自己批判したということが、はたしてどこまで本物かわからない。しかし、若いものの方もよく見ていて、口でもってわたしは悪かったと言ってもなかなか許さないらしい、というのは、人間が顔を見て、その人が本当にそう思っているのか、それとも今とりあえずそういうふうに行っているのか、わかるらしいです。だから、自己批判にも二つのタイプがあると思うんです。とりあえず造反派の言うことを聞いておいて、やがて自分たちがもう一回取りかえすという気持の人もあるらしいけれども、他のタイプでは、素朴というか、恥かしがって實際言

〔(2) ページにつづく〕